

「経営情報イノベーション研究」巻頭言

経営情報イノベーション研究科長

金 川 幸 司

このたび、「経営情報イノベーション研究」の第2号を発刊することができました。先進国では、景気の低迷もあり、行政は限られた予算で最大の効果を上げるといった視点からより一層のアカウントビリティが求められるようになっていきます。そこでは、監査文化と言われるマネジリアリズムが隆盛となっています。アカウントビリティの要求は、当然のこととしても、行き過ぎたマネジリアリズムは、ペーパーワークを過度に増やし、現場の自由度を奪います。また、地域社会におけるイノベーションの観点からも、そのインセンティブや活力を削ぐものであるとの論調も見られます。このように、公共部門やコミュニティ、さらには企業におけるイノベーションを取り巻く環境は楽観視できない状況にあると言えるでしょう。そのような中においても、世界各国では、様々な政策的イノベーションが各種社会実験等を通じて行われており、日本社会もマネジリアリズムを超えた新たなステージへの移行が求められていると言えます。それは、ややもすると木を見て森を見ていなかったり、重箱の隅をつつくような、監査文化から決別すること、そして、政治、行政、企業、諸団体が持つ既得権によって、社会のダイナミズムが失われるというジレンマを打破するような新たな動きに繋がるに違いありません。

本稿では、これらの、社会的なイノベーションを積極的に取り上げており、今後も、そういった観点から関連テーマを取り上げていく予定です。